

早稲田大學東洋哲學會 第三十八回大會

〔日時〕 六月十二日（土曜日）午後一時より

〔会場〕 Zoomミーティング

〈研究発表および講演要旨〉

【研究発表】

『大日經疏』における戒の異稱について

山尾 宥勝

密教独自の戒については、『大日經疏』や『金剛頂經』所説の「三昧耶戒」という語が一般に用いられてきた。ただし『大日經』には、「無爲戒」や「三世無障礙智戒」などの語も見られ、『疏』にも詳説されている。日本密教の傳統においては、これら密教戒の異稱を「三昧耶戒」という名の下に統合しようという試みがなされてきた。しかし、そのような試みは、密教戒にまつわる種々相を理解する上で、見失われてしまう点も少なくない。本発表では、『大日經疏』所説の密教戒の異稱が示す意義について、東密學匠の考察を通して概観したい。

天觀念から見る李贄童心説と羅汝芳の赤子の心の比較

及川 伶央

本発表では、天觀念に焦點を當てて李贄の童心説と羅汝芳の赤子の心の比較を行う。思想の前提として羅汝芳は天を設定する。良知・赤子の心・人間は天によって一貫しており、それ故に人間の生まれながらの心は正しいと羅汝芳は説く。生まれながらの純粹な心である童心が理想であるとする点において李贄は羅汝芳と軌を一にする。しかし、李贄は童心の根據として天を持ち出すことはしない。兩者の思想内容は接近しているが、天觀念に着目すると決定的な差異がある。天觀念を中心にして兩者の間の差異を検討するのが本発表の目的である。

彌勒・彌陀信仰よりみる法華懺法の實修と次第の確立

矢島 礼迪

平安期より天台寺院や宮中で修されていた法華懺法は、智顛の『法華三昧行法』をもとに構成されている。しかし、『法華三昧行法』の發願段にみえる兜率天への往生思想は、法華懺法になると極楽淨土への往生思想へと變化している。兩次第の差異に關しては既に先行研究でも指摘されているが、次第が變化し確立していく過程は明らかにされていない。本発表では彌勒・彌陀信仰の觀點から『法華三昧行法』の諸本や註釋書類、また實修に關する記録を検討し、法華懺法の次第が確立していく過程を考察する。

『阿毘達磨大毘婆沙論』における有漏法と無漏法…

説一切有部の佛身有漏説から抽出されるその發展のモデル

藤本 庸裕

「有漏」(sāsrava)と「無漏」(anāsrava)は佛教において重要な概念である。一般的に「有漏」は輪廻的生存に属するものを、「無漏」は涅槃などの世間を超出した事物を形容するのに用いられる。しかし、後代の説一切有部では「有漏」と「無漏」の定義は一定せず、各論書において異なる定義が与えられている。本発表では、説一切有部の教義を集成した『阿毘達磨大毘婆沙論』において複数想定されている「有漏」と「無漏」の定義を、同學派が展開する「佛の身体は有漏である」という佛身有漏説から抽出し、その發展の次第を仮説として提示する。

程顥、程頤の「理」、「性」、「命」の思想—王安石の「性命之理」との對立から— 田村有見恵

従来道學は王學との對立から興った學であるとされている。その王學と道學の爭點の一つは、王安石の『易解』、『老子注』、『莊子解』、『金剛經注』、『華嚴經解』、『維摩詰經注』、『楞嚴經疏解』の著書（現在は大部分散逸）に基づく三教融合の「性命之理」、「窮理盡性以至於命」の説であったと考えられる。本発表では、反王學、反佛老を掲げる二程の「理」、「性」、「命」の説を王安石の學説との差異點に着目して検討する。

【講 演】

龍樹における存在と言語

桂 紹隆

般若經の空思想を繼承し、中觀派形成の基礎を築いた龍樹に關して、近代の研究者は様々な理解を提示してきた。特に、「無自性・空」による否定を重ねた先に、龍樹がなんらかの存在を想定していたか否かについては、未だ決着を見ていない。そもそも決着がつかない問題かもしれないが、二十世紀の論理學者タースキーやカーナツプが提唱した「對象言語とメタ言語」という視點を導入して、あえてこの問題に取り組んでみたい。龍樹の原典だけでなく、羅什譯『中論』と近年公刊された丹治昭義氏の研究を参照しながら、議論を進めていきたい。